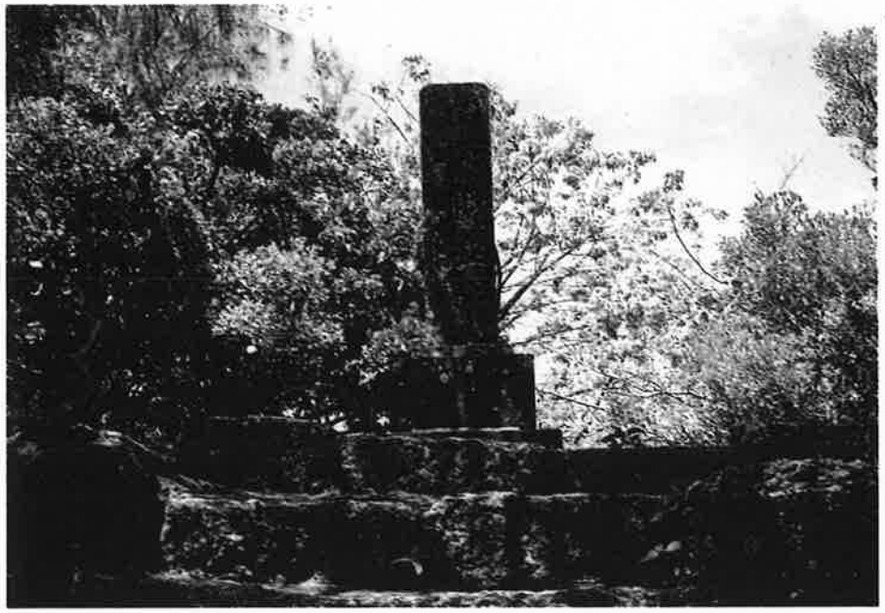
沖縄・糸満市の昔話

立命館大学説話文学研究会
糸満市教育委員会



南　山　城　址　の　碑

嘉手志川（かでしがー）

糸満大綱引き

白　銀　堂

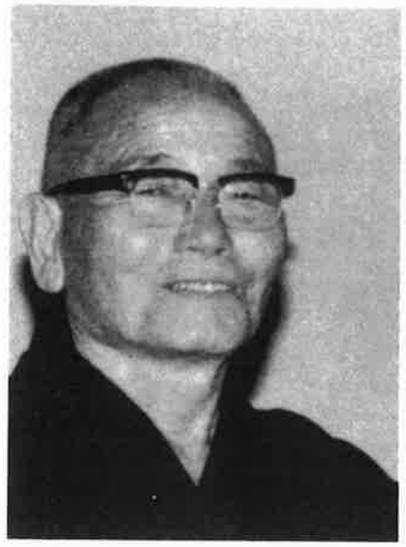
真栄里大綱引き

糸満ハーレー

糸満市の主な語り手

字武富　長嶺和男

字糸満　野原由宗



字糸満　上原牛蔵

字糸満　田場天龍

字北波平　大城正太郎

字武富　大城トミ

字糸満　金城安彦

字糸満　上原亀広

字名城　新垣武登

字真栄里　島袋仁栄

字賀数　照屋亀八

字阿波根　平田徳太

字小波蔵　伊敷フヂ子

字小波蔵　伊敷カミ

字与座　伊敷清保

字豊原　国吉マツ

字伊原　玉城ハル

字米須　仲宗根善道

字新垣　宮里栄吉

字国吉　翁長文子

字糸満　大城英次

序文

糸満市教育委員会教育長　金城正徳

このたび、糸満市内に伝わる民話を『糸満市の昔話』として発刊できましたことを市民とともに喜びとするところであります。

『糸満市の昔話』は立命館大学説話文学研究会の方々が、一九八七年から一九九一年にかけて、市内全域にわたりお年寄りの方々から聞き取り調査したものをまとめあげたものであります。

近年、社会情勢のめまぐるしい変化の中で、民話を語り継いでいくことが難しくなってきています。そのような中で、遠い昔から代々語り継がれてきた民話を後世に残していくため、「語り」を文字化し、市民に民話のすばらしさを理解していただくことは極めて意義深いことだと思います。

民話は、庶民の生活の中で育まれ語り伝えられてきた生きた文化財であるとともに、言葉づかいや抑揚など、語り手独特の個性が活かされており、すばらしい芸術作品でもあります。

今回収録した作品は、語り手の口調をなるべく損なわないように配慮がなされ、また挿し絵も多く入れてあるので楽しく読んでいただけることと思います。

『糸満市の昔話』が家庭や学校現場、あるいは社会教育の場で活用され、情報氾濫の現代社会の中において、ややもすると忘れ去られようとしている「語り」の場における心の温もりを呼び覚まし、二十一世紀に向けて、新たな地域文化の創造に役立つことを期待いたします。

おわりに、今回の民話調査に快く協力してくださった各字の皆様、調査を担当していただいた立命館大学説話文学研究会の皆様に対しまして深く感謝申し上げます。

目次

写真

序……教育長　金城正徳

目次

地図

《解説》

一　市の概要……金城　善…1

二　昔話採訪記録……松本孝三…7

三　伝承の系譜・機会……松本孝三…12

四　糸満説話の伝承世界……福田　晃…27

《本文》

凡例……43

神話

1　アマミキヨとギジムナー……45

2　稲の始まり……46

3　五穀の始まり……47

4　大力のイッカンウェーブーとジョウサグンウェーブー……48

伝説

5　糸満の地名由来……49

6　暁城の名の由来……50

7　与那原の綱引由来……51

8　小波蔵の綱引由来……53

9　阿波根の飯石の由来……54

10　金の砥石……54

11　フチャギ餅の由来……55

12　左御紋の始まり……56

13　火返し（ヒーゲーシ）御願……57

14　七月お盆の始まり……59

15　位牌の由来……60

16　ニービチ由来(イ)……61

17　ニービチ由来(ロ)……62

18　伊原の喜納ワタブトゥの土地分け……63

19　糸満のヒーダチ御願……64

20 ユードレ墓の由来……65
21 波平玉川の由来……66
22 遊女墓の由来……67
23 真玉橋の人柱（イ）……69
24 真玉橋の人柱（ロ）……71
25 真玉橋の人柱（ハ）……72
26 白銀堂由来（イ）……73
27 白銀堂由来（ロ）……76
28 普天間権現由来……78
29 運天港由来……79
30 婿入橋の由来……80

史譚

31 かぎやで風節……81
32 北谷王子と黒鉄座主（イ）……82
33 北谷王子と黒鉄座主（ロ）……85
34 京阿波根親方（イ）……86
35 京阿波根親方（ロ）……88
36 内間金丸……89
37 大里嘉手志川と金屏風……90
38 網の始まり……91
39 名護親方と具志頭親方（イ）……92
40 名護親方と具志頭親方（ロ）……95
41 名護親方と具志頭親方（ハ）……97
42 名護親方と具志頭親方（ニ）……99
43 名護親方と具志頭親方（ホ）……101
44 米須按司の敵討ち……102
45 瓦屋情話……104
46 吉屋チルー……106
47 チャタンモーシー……107
48 仲村渠マカトゥ……107

本格昔話

49 天人女房……109
50 ハブ聟入……110
51 アカマタ聟入（イ）（浜下り由来）……111
52 アカマタ聟入（ロ）（普天間権現由来）……113
53 睡次郎……114
54 難題聟（熱田のマーシリー）……116
55 ウールンチブシ（勝連按司の難題・アガデーガマ由来）……120
56 継子話（麦搗き・二十日月）……123
57 継子の味噌弁当……124
58 継子の毒入り弁当……125
59 継子話（簑と七重ね毛）……125
60 継子とみみず……126
61 継子台……127
62 継子話（チバナより痛い）……127
63 兄弟の仲直り（イ）……128
64 兄弟の仲直り（ロ）……130
65 仲順流り（イ）……131
66 仲順流り（ロ）……133
67 仲順流り（ハ）……134
68 仲順流り（ニ）……135
69 大年の客……136
70 猿長者……139
71 泥棒の恩返し……142
72 鬼餅由来（イ）……143
73 鬼餅由来（ロ）……145
74 鬼餅由来（ハ）……146
75 鬼の家の便所……147
76 クスケー由来……148
77 ハジチ由来……149
78 姥捨山（イ）（柴折り・難題）……150
79 姥捨山（ロ）（柴折り・薩摩の難題）……152
80 姥捨山（ハ）（馬の親子）……153
81 ハブの昇天……154
82 フカに助けられた男……154
83 武士と肥やし……155
84 唐商いよか糠商い……156
85 モーイ親方（イ）（勉強・煙草は一回・嫁取り・薩摩の難題）……157
86 モーイ親方（ロ）（勉強・薩摩の難題）……160
87 モーイ親方（ハ）（嫁取り・薩摩の難題）……162
88 モーイ親方（ニ）（薩摩の難題）……165
89 モーイ親方（ホ）（薩摩の難題）……167
90 モーイ親方（ヘ）（打たぬ太鼓・灰縄）……169
91 モーイ親方（ト）（嫁取り）……170
92 モーイ親方（チ）（嫁取り）……171
93 モーイ親方（リ）（煙草は一回）……172
94 モーイ親方（ヌ）（勉強）……173
95 モーイ親方（ル）（年若い馬・煙草は一回）……175
96 モーイ親方（ヲ）（草履と下駄）……176
97 モーイ親方（ワ）（小便の罰金）……177
98 モーイ親方（カ）（出たものは切る）……178
99 モーイ親方（ヨ）（卵割り・出るか入るか）……179
100 モーイ親方（タ）（ヌブシの玉）……179
101 モーイ親方（レ）（マブイの恩返し）……180

102 モーイ親方(ソ)(三本の矢)……183
103 モーイ親方(ツ)(親方の最期)……183

因縁・化物譚

104 生き返った大屋のアヒトゥー……185
105 後生戻りの話……187
106 ナーチャミー由来(イ)……188
107 ナーチャミー由来(ロ)……189
108 子育て幽霊……190
109 シバサシ由来……191
110 平良(テーラ)シカマグチ……192
111 逆立ち幽霊……193
112 国吉坂の遺念火……195
113 遺念火の話……196
114 識名橋の幽霊マジムン……197
115 キジムナーと友達(イ)……198
116 キジムナーと友達(ロ)(名嘉地大屋)……199
117 キジムナーと友達(ハ)(名嘉地大屋)……201
118 キジムナーと友達(ニ)(ムーチー汁)……201
119 キジムナーと友達(ホ)(我那覇大屋)……202
120 坊さんと猫……202

笑話

121 ナヴァーグワーの知恵(イ)(尻拭き)……205
122 ナヴァーグワーの知恵(イ)(食い逃げ)……206
123 山原と団亀……207
124 糸満の女は男勝り……208
125 渡嘉敷ペークー(イ)(十日月・嘘の名人)……209
126 渡嘉敷ペークー(ロ)(十日月)……210
127 渡嘉敷ペークー(ハ)(王様と碁・米俵・着物)……212
128 渡嘉敷ペークー(ニ)(王様と碁・米俵・味噌)……214
129 渡嘉敷ペークー(ホ)(低頭門・米俵・相撲)……216
130 渡嘉敷ペークー(ヘ)(煙草は一回)……217
131 渡嘉敷ペークー(ト)(塩がうまい・低頭門)……218
132 渡嘉敷ペークー(チ)(屋根の葺き替え)……219
133 渡嘉敷ペークー(リ)(競馬)……219
134 渡嘉敷ペークー(ヌ)(ルカ島返し)……220
135 津堅バーマー(十日月・屋根の葺き替え)……220
136 糸満マギー(イ)(あそこは人並み)……222
137 糸満マギー(ロ)(山原船)……223
138 糸満マギー(ハ)(帆柱)……224
139 糸満マギー(ニ)(寿命)……225
140 糸満マギー(ホ)(足跡)……226
141 保栄茂タルチー(イ)(力比べ)……226
142 保栄茂タルチー(ロ)(力比べ)……227
143 保栄茂タルチー(ハ)(妹の大力・力比べ)……228
144 保栄茂タルチー(ニ)(仕事は弁当)……231
145 保栄茂タルチー(ホ)(牛抱え・仕事は弁当)……232
146 保栄茂タルチー(ヘ)(山原船)……234
147 保栄茂タルチー(ト)(保栄茂の最期)……235
148 保栄茂タルチー(チ)(保栄茂の祟り)……235
149 保栄茂ユーチー(仕事は弁当・牛抱え・最期)……236
150 文徳マサー(イ)(空手の修業)……237
151 文徳マサー(ロ)(空手の修業)……238
152 文徳マサー(ハ)(藁綯い)……239
153 文徳マサー(ニ)(大力)……240
154 文徳マサー(ホ)(足型・天井蹴り)……241
155 文徳マサー(ヘ)(力比べ)……242
156 アガリ武士の力比べ(イ)……243
157 アガリ武士の力比べ(ロ)……244
158 アガリ武士の力比べ(ハ)……244
159 サクマエバーの大力……245
160 ガネクダクローの強力譚……246
161 名城ヘンサの早足……246

鳥獣草木譚

162 雀孝行(イ)……247
163 雀孝行(ロ)……248
164 雀孝行(ハ)……249
165 雨蛙不孝……250
166 雀酒屋……250
167 十二支由来(イ)……251
168 十二支由来(ロ)……253
169 猿の生き肝……254
170 犬の脚……255

世間話

171 キジムナーの胸押え(イ)……257
172 キジムナーの胸押え(ロ)……258
173 キジムナー封じ……258
174 兼城のカマロー……259
175 遺念火と相撲……259

176 煙草は吸うもの……260
177 マーザーデーに出会った話……260
178 ヨウドレの由来……261

対訳資料

179 人の始まり……263
180 稲の始まり……265
181 犬の見つけた井戸……266
182 与座の名の由来……268
183 慶留(ぎる)バーリーの祭り……269
184 米須按司の敵討ち……270
185 アカマタ聟入(浜下り由来)……276
186 難題婿(二つの馬に鞍一つ)……278
187 猿長者(イ)……279
188 猿長者(ロ)……283
189 安里の童……287
190 モーイ親方(ヌブシの玉・勉強)……289
191 ギジムナーと友達……292
192 名嘉地大屋とギジムナー……294
193 渡嘉敷ペークー(十日月・味噌・競馬・米俵)……295
194 雀孝行……298
195 アヒラーマジムン……300
話型対照表……305
語り手一覧……316
採訪者名簿・翻字者名簿……322
あとがき……立命館大学教授 福田 晃……323

豊見城村
武富
北波平
阿波根
賀数
東風平町
潮平
座波
豊原
西崎町
西川町
兼城
与座
照屋
糸満
大里
国吉
新垣
具志頭村
真栄里
真栄平
伊敷
真壁
宇江城
名城
小波蔵
糸洲
南波平
福地
伊原
米須
大度
摩文仁
喜屋武
(東辺名)
東里
(上里)
山城

沖縄本島
糸満市

沖縄・糸満市の昔話

解説

一　糸満市の概要

(1)　糸満市の位置と行政区画

私たちの住む糸満市は、沖縄県の県都那覇市のある沖縄本島の南部の西側に位置し、人口五万四千人の農業と商業と漁業のまちです。四五、八四平方キロメートルの面積を有し、周囲は北から東にかけて豊見城村・東風平町・具志頭村と隣接しています。南に太平洋、西に東シナ海を望み、西方海上には慶良間諸島が眺望できます。南端にある喜屋武岬が黒潮を太平洋と東シナ海を分けるように突き出しています。

本市は、古くからある三一の字（北から字武富・字北波平・字阿波根・字賀数・字座波・字潮平・字兼城・字照屋・字糸満・字豊原・字与座・字大里・字国吉・字真栄里・字新垣・字真栄平・字宇江城・字真壁・字伊敷・字小波蔵・字名城・字糸洲・字南波平・字摩文仁・字大度・字米須・字伊原・字福地・字山城・字東里・字喜屋武）と、西側の海岸を埋め立てて造成した西崎町と西川町とで構成されています。

明治36年当時の糸満市域

金城善

(2) 地質と地形

沖縄本島南部の地質は、中新世後期から更新世初めに形成されたクチャと呼ばれる青灰色のシルト質泥岩（島尻層群）を基盤に、その上を更新世に珊瑚礁を形成していた生物の石灰質遺骸の堆積物によってできた琉球石灰岩（琉球層群）が覆っています。西側の海岸には砂や泥の堆積物による沖積層を形成しています。南部の地形は、地殻変動によって隆起した台地をいくつかの断層が横切り、多くの断層崖や海岸段丘崖を形成しています。また、地下水の溶解浸食作用によって形成されたカルスト地形にはブリやアブ（落ち込み穴）やガマ（鍾乳洞）が発達しています。

本市の地質構造もこの島尻層群を琉球石灰岩の琉球層群が覆った構造になっています。島尻層群からなる地域には保水性のある肥沃な灰色のジャーガルが分布し、琉球層群からなる地域には保水性に乏しい赤色の島尻マージが多く分布しています。地形は波状に起伏する琉球石灰岩の丘陵が東西にいくつも走り、その稜線に平行する南斜面にほとんどの村落が位置しています。西海岸にはリーフが発達し、その内側のイノー（礁池）には魚介類が豊富に生息し、古くから良好な漁場として発展してきました。そこには、かつてはアナギ（沖之島）・イーユー（伊保島）・ウカワ（岡波岩）・エーギナ（エージナ島、国絵図には「あいけな島」）・オーグワー（奥武島）といった小島が点在していたのですが、幾度かの埋め立てによって報得川（むくえがわ）河口の三つの島（オーグワー・アナギ・イーユー）は陸続きとなってしまいました。海岸線は、本市の発展とともにこれからも大きく変化していくことでしょう。

(3) 気象

本市の位置する沖縄本島は、亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温が二二度から二三度で、月別平均気温が一六度から二八度の範囲内にあり、年較差が小さく四季の変化に乏しい気候となっています。また、夏期になると三〇度を越える日も多く、加えて湿度も八〇パーセント以上になるため、かなり蒸し暑い日が続きます。沖縄が台風の進路にあるため年に数個の台風が接近し、降水量は年間二千ミリ前後と多いのですが、年によっては降雨量が少なく断水や

旱魃に悩まされることもあります。

(4) 歴史と文化

南山の興亡　現在、糸満市立高嶺小学校が位置する石灰岩丘陵は、南山城（なんざんグスク）と称された城が築かれていたところであります。ここは糸満市指定文化財で、南山城跡と称しています。また、大里城（ウーザトゥグスク）とか、大里村の大里城跡と区別するために島尻大里城（シマジリウーザトゥグスク）とも呼ばれています。築城年代は、野面積みの石垣や遺物からして一四世紀ごろではないかと考えられています。時代は、グスク時代とか三山鼎立時代と称される時期にあたります。築城した人の伝承は残っていませんが、『おもろさうし』で「しものよのぬし（下の世主）」とうたわれた有力な支配者であったとみられています。『おもろさうし』によれば、本市域には他にも「くめすよのぬし（米須世主）」や「いしやらよのぬし（石原世主）」、「やまきたらすさへ」、「やまくすくたたみきよ」、「やまきにや」、「ふくしおわるよのぬし（福地に居る世主）」、「まかひおわるよのぬし（真壁に居る世主）」、「あはこんの大や（阿波根の大屋）」という有力者が群雄割拠していたことがわかります。

南山王統は、大里按司（ウーザトゥアジ）をはじめとして、承察度（しょうさっと）・汪応祖（おうおうそ）・他魯毎（たろまい）と続いた王統であります。その支配は、はじめ「しもしましり（下島尻）」と呼ばれた兼城・大里・真壁であったが、しだいに豊見城・喜屋武・摩文仁・東風平・具志頭・玉城・知念・佐敷・島添大里にまで及んだと思われます。そして、沖縄本島を南山・中山（ちゅうざん）・北山（ほくざん）の三つの勢力が覇を競う三山鼎立時代には、南山王承察度は一三八〇年に中山に次いで明国に朝貢し、進貢貿易を展開しています。南山の対明貿易の拠点は、ヘーンカタ（南の潟）と報得川の河口であったといわれています。ヘーンカタはかつては入江で、その奥の門中墓があるあたりは南山城の船着場があったといわれます。また、報得川の兼城橋付近までは船が遡上し、左岸の断崖上には南山の御物城（ウムヌグスク）ともいわれる照屋城（ティラグスク）が築かれています。

『おもろさうし』に「大さとは　さとからる、かでしかわ　みづからる」と歌われ、南山城の東にある水量豊かなカディシガー（嘉手志川）から湧き出る水が城下の田畑を潤し、南山繁栄の基盤をなしていました。しかし、南山王他魯毎は、この川と佐敷の小按司（尚巴志）の持つ金屏風とを交換したことで、臣下の信望を失い、ついには巴志によって滅ぼされてしまったといいます。

近世・近代の行政区画　糸満市域を構成する行政区画は、古くは「しもしましり」・「きやめ」・「まふに」と称されていました。「しもしましり」は、いつしか島尻兼城・島尻大里・島尻真加比の三つに分割され、島尻大里間切は一六六七年に高嶺間切に改称しています。近世を通じては兼城・高嶺・真壁・喜屋武・摩文仁の五間切であります。それぞれの間切には、間切を領する按司地頭と総地頭の両総地頭と村を領する脇地頭が任じられていました。総地頭らは、首里や那覇に居住し、間切や村を支配していました。間切や村の行政を実際に担うのは、地頭代を頂点に夫地頭やさばくり（首里大屋子・大掟・南風掟・西掟）、村掟らで、総務・納税・糖業・農務・林務・治安等の職務を分掌していました。

市域の村々は、一七世紀後半の間切境界の見直しによって大きく変化しています。兼城間切は豊見城間切から武富・波平・阿波根の三か村を編入し、中城・崎中城の二か村を高嶺間切へ、伊敷・新垣の二か村を真壁間切へ出して、武富・波平・阿波根・賀数・座波・潮平・兼城・照屋・糸満の九か村となっています。高嶺間切は古波蔵・名城・糸洲の三か村を真壁間切へ出し、兼城間切から編入した中城・崎中城の二か村と「わたりきな」・「げる」・「神里」・「くびり」・「中間」の五か村を近くの村々に併合して、与座・屋古（後に大里）・国吉・真栄里の四か村となっています。真壁間切は兼城間切から新垣と伊敷の二か村を、高嶺間切から古波蔵（後に小波蔵）・名城・糸洲の三か村をそれぞれ編入し、喜納と中間の二か村を近くの村に統合して、真壁・あがるい（後に宇江城）・前平（後に真栄平）・新垣・伊敷・名城・小波蔵・安里・糸洲の九か村となっています。喜屋武間切は「さき村」を廃して、喜屋武・福地・山城・東辺名・上

里の五か村となっています。摩文仁間切は摩文仁・小渡・米次（後に米須）・石原・伊礼の五か村で、境界の見直しや村の統合などは無かったようです。

一九〇八（明治四十一）年四月一日に施行された「沖縄県及島嶼町村制」によって、糸満は兼城間切の一村落から分離し、町制を布いて沖縄県で唯一の「町」が誕生しました。兼城間切は兼城村に、高嶺間切は高嶺村に、真壁間切は真壁村に、喜屋武間切は喜屋武村に、摩文仁間切は摩文仁村に改称されました。

一九四五（昭和二十）年の沖縄戦によって、市域は壊滅的な戦災を受け、多くの尊い人命と遺産を失いました。特に人口が激減した真壁村・喜屋武村・摩文仁村の三村は、一九四六年に合併して三和村となって、復興に尽力しています。それから一五年後の一九六一年には、糸満町を中心に兼城村・高嶺村・三和村が合併して新たな糸満町を形成しています。そして、一〇年後の一九七一年には、市制を施行して県下で一〇番目の市となっています。

農業の振興　市域の田は、水源をもたない天水田が多く、しばしば旱魃による害を被ることがありました。一七二六年、尚敬王の命により、高嶺間切与座村の泉の水を周辺の三間切へ引くための用水路が築かれています。この用水路だけでなく、私財を投じた水路の建造が武富村でも行われています。これらは、長年使用するうちに所々が決壊し、補修の必要が生じたとき、私財を投じて改修を行い、農業の振興として報奨された記録をみることができます。

親族組織と門中墓　字糸満は、三腹あるいは七腹の親族集団にはじまり、近世中ごろに近隣の農村から漁業を営みに移り住むものが出て、やがては一三腹に増加し、明治の初めには首里・那覇に次ぐ大きな集落を成していました。現在は四〇の親族組織（腹）となっています。

沖縄最大の門中墓として知られる幸地腹（コーチバラ）と赤比儀腹（アカヒギバラ）の両門中の墓は、兄と妹の婿の子孫だけが使用する血縁共同墓であります。一六八四年の墓碑には、上原掟親雲上の八人兄弟と金城ちくどのの三

人兄弟の子孫の墓の使い分けが記されています。創建当時から一八六八（明治元）年までのトーシーバカ（当世墓）は一つの小さな亀甲墓であったようです。近代になって子孫が広がり、年間の死者の数も増すと、一基では洗骨までの処理が間に合わなくなり、遺体が朽ちるまでの間安置しておくためのシルヒラシ墓を一八六九年に一基増設しています。それでも子孫が増え、一九一〇年と一九一一年にもシルヒラシ墓の増設を行っています。一九三五（昭和十）年には、小さなトーシーバカを現在見るような大きな墓に立て替えるとともに、あと一基のシルヒラシ墓を増設し、屋根の形もこれまでの亀甲形式のものから破風形式の家型の墓に改修しています。

糸満漁業の発展　糸満の伝統的な漁業は、糸満の西海岸に発達したリーフを漁場とするアンブシ（建干網）漁と呼ばれる沿岸漁業でしたが、鰹釣りやイカ釣り、トビウオ刺し網といった沖合漁業へと展開し、一八八四年にミーカガン（水中眼鏡）が考案されてからは、潜水を主体とするパンタタカーやアギヤーと呼ばれる追込網漁業へと発達していきました。獲れた魚は、消費地である那覇等へと運ばれ、カミアキネー（頭上運搬による商い）で売りさばかれました。組織的な漁業経営であるアギヤーからは、多くのイチマンアンマー（糸満婦人）がワタクサー（私財）を蓄積することができました。このことをマルクス経済学者の河上肇が「琉球糸満の個人主義的家族」として論文発表したことにより、多くの研究者らが糸満に興味を抱いて訪れるようになりました。

二　昔話採訪記録

松本孝三

(1)　調査方法

この昔話集に採録する民間説話は、昭和六十二年から平成三年にかけての採訪、および、平成七年の補足調査の結果に基づいている。当該地へは計五回の採訪調査を行ない、その総数二百四十二名（男百二十一名、女百二十一名）の語り手にお会いして伝承話をうかがったものである。

その調査方法は、始め二回の調査は、各集落（十九地区を調査）の老人クラブの方々に公民館・集会所に集まっていただき、一班三・四名の調査者が赴いて伝承話をうかがい、録音テープに収録するという形態をとった。三回目の調査からは前回の調査に基づいて、主に個別訪問の形を主体とし、伝承話のほか、伝承の系譜・機会、民俗についても調査を行なった。なお、第五回目は補足調査で、特徴的な話柄についての伝承の系譜、伝承の機会などを中心に調査を行なった。

語られた民間説話は録音テープに収録し、後にこれを翻字することを原則として調査ごとに採訪ノート、話者カードを作成し、採訪状況や集落の概況、民俗、語り手の伝承事情、話柄とその梗概などを記録している。

(2)　話　型

本集に収録した民間説話の総数は百七十八話である（対訳資料十七話は除く）。その内訳は、神話四話、伝説二十六話、史譚十八話、本格昔話五十五話、因縁・化物話十七話、笑話四十一話、鳥獣草木譚九話、世間話八話である。

南島における民間説話の伝承実態には、独自の伝承上の特質がみられるために、必ずしも『日本昔話名彙』（柳田国男氏編）や『日本昔話大成』（関敬吾氏編）の分類におさまらないものがあるが[注(1)]、参考までに共通と思われる話型

を掲げるならば、『日本昔話名彙』に含まれるものは十六話型、『日本昔話大成』に含まれるものは二十四話型となる。その内訳は次のとおりである。

『名彙』による話型数……
- 完形昔話……十話型
  - 因縁化物譚……一話型
  - 派生昔話……二話型
    - 笑話……四話型
    - 鳥獣草木譚……〇話型
  - 果なし話……五話型

『大成』による話型数……
- 動物昔話……九話型
- 本格昔話……十二話型
  - 笑話……〇話型
  - 形式譚……

(3) 形式

昔話の呼称・発端句・相槌・結末句として採録できたものは次のとおりである。これらは、実際の語りの場とは別に思い出していただいたものもあるが、発端句と結末句についてはその多くが、収録された実際の語りの中で使われていたものである。ただし、それは本土に見られるような本格昔話に限定されてはいないし、すべての語りに付随しているものでもない。

おおよそ南島においては、本土のそれに較べて昔話の形式句は未発達であるということがいわれているが、沖縄本島南端に位置する当糸満地方において、かつて、本土とはやや異なった形ながらも、南島独自の、形式句を備えた口

承文芸の世界が育まれ、豊かに持ち伝えられていたことがうかがえるのである。[注(2)]

〈呼　称〉
- チテー
- チテーバナシ
- ンカシヌチテーバナシ
- トーバナシ

〈発端句〉
- 昔
- 昔ね
- 昔ですね
- 昔々
- 昔、大昔の話になるが
- 昔あるところに
- これは昔々の話ですよね
- 昔の人の話でね
- これ、本当かうそか、これはわからんけどもよ
- そんなことあったかなかったか知らないがね
- チテードー
- グエーサチウンヌケービラ（ご挨拶いたします）
- アヌヨーエン

〈結末句〉

・昔のお爺ちゃん、お婆ちゃんから聞きました
・こういう話聞きました。これは昔話
・こういうお話がありますがね
・この話もあったんだって
・そんな話もあったんだがね
・そういう話だ
・その話もあったんですよ
・そんだけの話です
・ニフェーデービル（ありがとうございました）
・ニフェーヤイビータン（ありがとうございました）
・ワカイビタンデー（わかりました）

〈相　槌〉

・アンヤイビーンナー（そうですか＝目上の人に対して）
・アンヤンナン（そうですか＝目下に対して）
・アンヤンドー（そうですか＝目下に対して）

注

(1) 福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』（平成八年　世界思想社刊）所収の福田晃氏「Ⅰ　総論　南島説話の伝承世界」にその特質が総合的に分析されている。

(2) そのことについては、本書解説「三　伝承の系譜・機会」で述べる。なお、福田晃氏はそのご論攷「沖縄地方の民間説話―その「語り手」をめぐって―」の中で、名護市の山本川恒翁の語りを例にあげ、そこに昔話の叙述の形式が本格昔話を指向する中で笑話も伝説も昔話化して語られ、語りの形式を整えていった形跡をたどっておられる（『日中文化研究』第五号《特集》「アジアの中の沖縄」平成五年　勉誠社刊所収）。また、拙稿「南島説話の伝承者」でも同じ山本川恒翁の語りの発端句と結末句について、その叙述の形式の一貫性を分析している。（福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』平成八年　世界思想社刊所収）。

三　伝承の系譜・機会

松本孝三

(1)　はじめに

我が国の民俗社会から、民間説話の伝承の場が失われてしまったといわれて久しい。確かに本土において、かつて昔話の宝庫といわれた地方をみてもその伝承の衰退ぶりはすさまじいものがある。たとえば、平成六年に訪れた新潟県佐渡郡新穂（にいぼ）村・同郡畑野（はたの）町の調査では、かつての昔話伝承の様相が嘘のような現実があった。昔話はやせ細り、断片化している。伝承が今まさに衰亡の危機に瀕しているのであった。畑野町では、かろうじて多田（おおだ）在住の長島タミ媼（大正四年生まれ）が往年の伝承の一端を示して下さったが、その夕ミ媼も、孫に囲まれて生活するという状況にはなかった。

佐渡といえば、戦前には鈴木棠三（とうぞう）氏がいち早く『佐渡昔話集』[注(1)]をまとめられ、戦後には丸山久子氏が『佐渡国仲の昔話』[注(2)]をまとめておられた。その鈴木棠三氏は昭和初期の頃の採訪について、「苦労らしい苦労を一つもしないで」古老たちの思い出すがままに昔話を記録したという。また丸山久子氏は、敗戦後の日本にはもはや昔話を本格的に語れる人がいないのではないかという不安を胸に抱いて佐渡を訪れ、畑野町での岩井キサ媼との出会いのなかで、その見事な語りを当時の重い録音機に忠実に記録し、師の柳田国男をして強く感動せしめたのであった。しかし、もはや今日の我が国においてはそのような採訪は望むべくもないであろう。

(2)　「むかし」は家の宝

かつて、福田晃氏は、「〝むかし〟は家の宝」と言われたことがある。[注(3)]つまり、昔話を語ることの喜びは、「自ら語ることで、心にあたためていた父母や祖父母の声を聞く」ことであり、そのことが、生きてゆく心の支えにもなってゆくというのである。その意味で昔話はまさしく「家の宝」なのであり、大切な「心の遺産」ともなるのであった。

しかし、今や我が国において、自ら語ることで父母・祖父母の声（語り）を聞くという場が残されているであろうか。この平和な時代にあって、いわゆる昔話伝承の場が急速に失われて久しい。時は激しく流れているのである。しかも昔話は生身の人間が語るものである。その語るべき口が失われれば、口伝えの文化の伝統はその灯を消してゆかざるを得ないといえよう。

私たちは、昭和六十二年の夏、糸満の地に採訪の第一歩をしるした。そこは、半世紀前の戦争末期に、我が国で唯一あの悲惨な地上戦を経験し、数多くの尊い人命を奪われ、壊滅的な打撃を受けた土地である。そのような体験を持つ地域において果たして昔話といったものが残っているのか、あるいはそれ以上に昔話調査それ自体ができるのか、といったことが大きな課題であった。今日、平和祈念公園・平和祈念堂などのある摩文仁の丘や、新たにつくられた『平和の礎（いしじ）』の存在する糸満市を選んだのは、そこがたんに南島における昔話の未調査地域であるということだけではなかったのだ。

しかし、昭和六十二年から平成三年まで、都合四回にわたる立命館大学説話文学研究会の調査結果は、そのような私たちの予想をおおいに覆すものであった。糸満市という活気あふれる町は、海沿いの旧糸満をはじめ、内陸の農村部、あるいは具志頭村や東風平町、豊見城村に接する地域も含め、沖縄のどの地域にも増して豊かな昔話伝承世界を復活させていたのである。それに伴って優れた伝承者も数多く見いだされた。それは少しく大仰な言い方を許してもらえるなら、恰も敗戦後、口頭伝承の終末を予想した柳田国男が佐渡の昔話に接し、その健在を確認し得た時の感懐にも例えられようか。

いずれにしても、今日、当糸満における昔話伝承の実態は、わずか五十一年前の悲惨な出来事を見事に克服しているもののように感じられたのである。しかしながら、そう考えてしまうことは歴史認識を誤らせることにもなろう。それはやはり幻想である。『平和の礎』に、集落ごとに刻まれた膨大な数にのぼる戦争犠牲者の名前を見るにつけ、

失われたものはあまりにも大きいと言わざるを得ない。

沖縄にはかつて、今日の状況と比較にならぬほど、神話・昔話・伝説・史譚・世間話といった、父祖の代から伝えられてきた実に多岐にわたる口頭伝承の世界が豊かに花開いていた。そうして、それらが親から子へ、子から孫へと連綿と語り継がれ受け継がれてきたはずなのである。まさしくそれらは「家の宝」として機能していたと思われる。戦争はそれらを一度は根刮ぎにしてしまったと考えねばなるまい。今、私たちが糸満市の調査で聞くことができた民間伝承は、その過酷な、筆舌に尽くし難い状況をくぐり抜け、なおかつ人々の復興・再生への願いとともに生き続けてきた文化の一端だったのだと言えよう。

(3) 糸満の主な語り手

さて、昔話伝承の系譜は、およそ家系伝承、村落（共同体）伝承、来訪者による伝承の三つに分けて考えることができる。それはまた、昔話伝承の担い手としての語り手と、伝承のなされた場および機会を軸として見てゆくことでもある。ここでは、当該地における主たる語り手についてまず紹介し、次項において、伝承系譜ごとに語り手としての特質を考察しながら当地方の昔話伝承の特徴を見てゆきたいと思う。

まず、当該地における昔話伝承の豊かさは、その優れた語り手の多さによって証明できよう。私たちの調査した中でもっとも多くを語って下さったのは豊原の国吉マツ媼で、四回の調査で延べ七十話を語られた。次いで名城の新垣武登翁の四十二話。次に、三十話以上の語り手を掲げれば、武富の大城トミ媼、与座の伊敷清保翁、賀数の照屋亀八翁、伊原の玉城ハル媼がいる。また、二十話以上の語り手を掲げれば、糸満の田場天龍翁・野原由宗翁、福地の上良正光翁、新垣の宮里栄吉翁、糸州の神里カマ媼、米須の仲宗根善道翁などがいるのである。その他にも、本文例話として比較的数多く掲げた語り手としては、糸満の金城安彦翁・大城英次翁・上原牛蔵翁、武富の長嶺和男翁、照屋の上江洲由豊翁、国吉の翁長文子媼、真栄里の島袋仁栄翁がおり、さらに、調査時ほとんどの話を方言で語られたゆえ

に、本書においてはその素晴らしい語りの多くを対訳資料として掲げた方に、小波蔵の伊敷フヂ子媼・伊敷カマ媼のお二人がある。こんなにもたくさんの優れた語り手が存在することは調査前には予想もつかないことなのであった。

(4) 家系伝承の中で

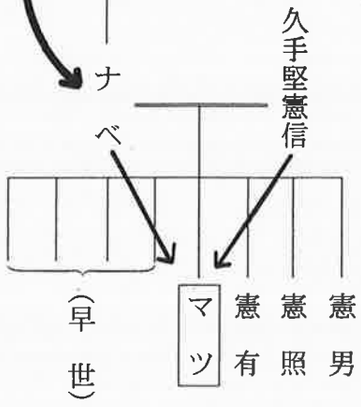
当地方において、伝承系譜の主体はやはり家系伝承によるところが大きいといえる。

まず、豊原の国吉マツ媼（大正三年九月一日生まれ）について紹介する。媼は典型的な家系伝承のなかで育った。父母から聞いた昔話を自らの語りの世界に受け継ぎ、昭和六十二年から平成三年までの四回の調査で語られた話数は延べで七十話にもなる。話柄としては、「アカマタ聟入（浜下り由来）」「鬼餅由来」「継子話」「姥捨山」「モーイ親方」「子育て幽霊」「ニービチ由来」「十二支由来」「雀孝行」「キジムナーと友達」などの話を得意とされ、本格昔話が中心のまとまった内容の語りであるが、神話・伝説・史譚なども語っておられ、幅広い伝承の世界を持っておられるのである。

マツ媼は、父親の憲信と母親のナベから多くの昔話を聞いている。ナベはその母親（姓は名幸、名前は覚えていない）から聞いていたという。伝承の機会は、雨降りの日などに父親は縄綯い、母親は芭蕉布を織る手仕事をしている時に、子どもはムシロを作りながら聞いたものである。また、マツ媼が結婚する時、夏物冬物を半年かけて自分で作ったというが、その時に母親が家事をやりながら語って聞かせてくれたともいう。

話を催促する時、媼がたとえば、「モーイ親方の話してくれ」と言うと父母が話してくれたが、それは芝居で見たものであったという。媼の語る「モーイ親方」の内容をみると、〈勉強〉〈煙草は一回〉〈嫁取り〉〈薩摩の難題〉〈小便の罰金〉〈草履と下駄〉〈ヌブシの玉〉など、「モーイ親方」の話柄のおおよそ一通りのものを語っておられる。同様のことは「継子話」についても言えた。媼の語った〈麦搗き〉〈二十日月〉〈毒入り弁当〉〈継子台〉もやはり当地方において聞くことのできた「継子話」のうちの主要な話柄なのであった。

その媼の伝承経路は次のように図示できる。



真栄里の島袋仁栄翁（大正十年十一月二十日生まれ）は、本格昔話の「70　猿長者」の語り出しとその最後に次のような注目すべきことを述べておられる。まず、冒頭の部分では、「それでは、私たちが小さい時に、お正月の、お爺さんやお父さんたちが、年頭の挨拶参りを兼ねての席でよく聞いた昔話をこれから始めます」とあり、話の最後には、「世の中には貧乏してもね、嘆いてはいけないと、僻んでもいけないと。また、金持ちになってもね、人を馬鹿にするんではない、奢るんではないと。金持ちも貧乏人も助け合って世の中を渡るもんだよというような教訓があって。いつも昔の年寄りの方々は、われわれの小さい子どもたちにはいつもそういう話を聞かして。そして、われわれもそういう話を聞いて、ああ、そうかなあと真面目にこれを聞いて、今でもうろ覚えではあるがまだまだ覚えて、たまには子どもたちにも、また、孫たちにも今現在実際話しております」と述べておられるのである。ここには実に、昔話の語られる機会、伝承系譜、昔話を語ることの意義といったことが見事に集約されているとみることができる。また、翁自身がその祖父や父親から聞いてきた「家の宝」としての昔話を、みずからの子や孫たちに語り聞かせているといった、昔話伝承のあり方からすればたいへん幸せな状況にある様子がうかがえるのである。翁からは話数だけみるとそう多くの話をお聞きしているわけではないが、語られた「猿長者」「モーイ親方〈薩摩の難題〉〈煙草は一回〉〈草履と下駄〉」「アカマタ聟入〈浜下り由来〉」「鬼餅由来」「雀孝行」「運天港由来」などは、当地方の主要な伝承を伝えておられるのであった。

翁は市の収入役を勤められ、また、家系は元首里の士族の家柄ということで先祖からの系譜を作ってもおられた。

武富の大城トミ媼（明治四十年十月二十四日生まれ）は十三歳で父（当時三十七歳）を亡くし、祖父母に育てられた。そのため、若い時から働き通しだったそうで、学校へも祖父母にお願いしてようやく行ける状態だったという。媼は昔話そのものよりも若い頃の苦労話をよくされ、「今は楽だからいいけど、昔、大変だった頃に亡くなった人たちはかわいそうだよ」とおっしゃる。

その媼は私たちに三十六話を話されているが、祖父母から昔話や世間話を聞いておられ、中でも昔話は主に祖母カマタさんから聞いている。祖母はムシロを作ったり糸を紡いだりしながら、あるいは雨が降って畑仕事ができない時にムシロを作りながら昔話を語ってくれた。作業をしている小屋には孫であるトミ媼や従兄弟たちが集まって祖母の話に聞き入ったということである。祖父の亀さんは首里に勤めており、無口であまり話はしてくれなかったとのことだが、雨が降った時などは昔の侍の話をしてくれたという。夜は家族全員でムシロ作りをしたが、その場では話はしなかったらしい。

媼の祖母は、媼が十三歳の時には六十一歳であった。その年から媼は働きだし、二十歳で結婚、子どももすぐできたが、媼ご自身も早くに夫を亡くされたので農作業に追われ、子どもたちに話をする暇がなかったそうである。

次に、三十四話を語られた与座の伊敷清保翁（大正十年三月十七日生まれ）の場合は、父母から昔話を相当聞いた覚えがあるということである。特に製糖時期の前には縄を綯ったが、一束五十尋綯わないと眠れなかったので、その仕事をしながら話を聞いたのである。

翁には家系による伝承のほかに、来訪者伝承といえるものとして、若い頃、宜野湾市から来て農業をしていた天久という人の父親が、面会のためこちらへ来た時、清保翁の家にも来たので、そんな時にその父親から話を聞いたそうである。また、翁の奥さんのスエ媼は主に父母・祖母からも話を聞いているが、水を貰いに来た近所の人からも聞いたということであった。

照屋の上江洲由豊翁（明治四十一年五月十九日生まれ）は、八重山の西表島白浜生まれで、家業の建築業を営んでいたが、奥さんが照屋の人だったので五十七、八歳でこちらに移住、手が器用なことを生かして六十歳頃から貝などの装飾品作りをしていた。翁の祖父は由信という人であったが、翁は特にこの祖父から八重山にいた頃多くの昔話を聞いたという。それは、子どもの頃同級生に清村君という話上手の少年がいて、クラスの童話会などで活躍していたのに触発され、それに負けまいと、暇であった祖父にせがんで夜昼となく話を聞いたといったことが大きかったらしい。翁は話をされる時に、まず姿勢を正し、「昔、どこそこであった話でありますが」というふうにおっしゃってから語られるが、それは祖父母から聞いたとおりの語り方であったと言われる。

また、小波蔵の伊敷フヂ子媼（大正十一年二月一日生まれ）は、祖父から寝物語に多くの昔話を聞いていたというし、同じ小波蔵の伊敷ヤス媼・伊敷ヨシ媼・伊敷カミ媼といった人たちも、昔話の伝承機会としては等しく夕食後や寝る前と言っておられた。

(5) 村落伝承の中で

家系伝承からやがて地域的な広がりの中に話が求められるなかで、村落の内部における伝承・伝播はそれに次いで重要な意味を担っているといえる。糸満においてもそれは、たとえば隣りの爺的な存在であったり、人の集まる場、年中行事などの場であった。

伊原の玉城ハル媼（大正三年一月十日生まれ）は、本文例話として十二話掲載し、豊原の国吉マツ媼と並ぶ語り手

である。しかもその話柄の幅は、神話・伝説・本格昔話・笑話に至るまでの広がりを示している。媼は、家系伝承としては曾祖母にあたる阿佐慶ゴゼイさんから聞いているが、それよりも媼に特徴的なのは、子どもの頃から青年に至るまで、村落内の社会生活とのつながりの中で多くの昔話を仕入れていることである。子どもの頃は「村屋（ムラヤー）」と呼ばれる集会所で子ども同士の昔話の語り合いがあったというし、媼はそこで得意の「継子話」をたくさん自分のものにしており、本書の例話にも媼の「継子話」が二話掲げられている。「村屋」へは、学校を終え、水汲みなどの仕事をした後、勉強をするために集まったというが、そのような時にも昔話が語られ、子どもたちの耳袋は肥やされていったのである。

さて、青年期になると、青年会の集まりで夕方から十時～十一時頃まで過ごした時に話をしたものであるといい、そんな時に覚えた話の中に「キジムナー話」や「保栄茂（びんぜん）タルチー」があった。「キジムナー話」などは肝試しとして話されたという。

東里の上良ヒデ媼（大正十二年五月十五日生まれ）のお話によると、昔話は、新屋かつひこさんという話好きのお爺さんがおられ、モーアシビの時によく語ってくれたそうである。それは媼の娘時代のことであった。

また、賀数の照屋亀八翁（明治四十四年七月十日生まれ）の場合は、夕涼みの時、近所のおじさんから話を聞いているし、真栄平の喜納サト媼（大正五年三月十日生まれ）は、旧暦八月十五日のウマチーの時にサト媼の家がその練習の場所になり、たくさんの人々が集まった折り、年寄りどうしが集まって話がされ、媼はそのような機会に話を聞いたという。

福地の上良正光翁（大正三年六月十五日生まれ）の伝承経路も、お祝いなどの寄合の場に皆が集まっている時、誰からともなく出てくる話を聞いて覚えたとのことで、特に女性から聞いた話が多かったそうである。また、翁の家は門中の元家であり、二月十五日、三月十五日、五月十五日、六月十五日のウマチーは、崎城（さきぐすく）へ行って行なうということだが、そんな折りにも話を聞く機会があったとのことである。しかし、それも戦前までのことで、

戦後はもうしなくなったという。

国吉の翁長文子媼（大正五年一月七日生まれ）の伝承も集落内の年寄りからで、話好きのお爺さんが村の中におられ、やはり門中の集まりなどの時にその人から昔話などを聞いたという。また、「仲順流り」は、真栄里での聞き取りでは、旧暦七月のお盆に村人たちが踊りを踊りながらこれを唄っていたということである。

ところで、学校の先生も子どもたちにとってはその伝承の話柄の広がりに重要な位置を占めている場合が多いといえるが、武富の長嶺和男翁（大正三年六月八日生まれ）は、十二・三歳の頃、尋常高等小学校の賀数直という先生から「渡嘉敷ペークー」や「名護親方と具志頭親方」「モーイ親方」などの話を聞いたことを覚えておられた。翁は親戚の叔父さんで、兼城の初代の地頭代だった大嶺親平という人からも「継子話」などを聞いたという。

当該地においても、その村落伝承をみると、実に様々なかたちでの伝承状況が知られるのである。

(6) 村落外伝承・来訪者伝承

糸満漁民の名で知られるように、特に旧糸満地域に生まれ育った人々には、常に外の世界を目指す進取の気象に富むところがあるようである。

糸満の上原牛蔵翁と上原亀広翁の兄弟の伝承には、漁師を生業とされていた人としての特徴がみられる。お二人は那覇市教育委員会の伊芸弘子氏を中心に、すでに昭和五十九年、『糸満市史〈民俗資料〉』の聞き取り調査を通してともに優れた語り手として知られていた。

上原牛蔵翁（明治三十八年八月十五日生まれ）は糸満の地に生まれ、元追い込み漁の頭を勤めた人である。十四、五歳の頃から海に出て網元の総領として鍛えられ、若い時分に無人島で潮待ちをする時など、先輩からしばしば話を聞かされたし、自分もやがてその役になってからは若い連中にしょっちゅう話を聞かせてきたという。私たちの調査で語って下さったのは、「普天間権現に助けられた話」や「フカに助けられた男」といった話で、いずれも船に乗っ

ていて遭難し、無人島に漂着、やがて苦難の末に神あるいはフカの助けによって帰還するといった話で、いかにも海の生活を彷彿させる伝承である。そのほかには、例話として紹介はできなかったが、「唐話〈天まで届く帽子〉」という大話や、同じく「唐話〈果てない蟻〉」という果てなし話ふうなものをお聞きしている。

ちなみに、伊芸弘子氏などの調査された資料を見ると、たとえば「ウフアガリ島の話」「黒潮太郎の話」は私たちの聞き取りした二話と同じものであり、また「那覇の海を貰った糸満のヤブ」は先の二話と同様、海にまつわる伝承といえる。ほかには「三穂田の始まり」「人間の始まり」「ルカ島の話」などといった神話的伝承、「火正月」「三月三日の浜下り由来」「鬼餅由来」「仲順流り」「宮古の豊見親の話」（犬聟入）といった本格昔話といえる伝承、「白銀堂の話」「真玉橋の話」「京阿波根親方の話」といった伝説、「生き返った人の話」「後生へ行って来た人の話」「ギジムナーの話」といった因縁・化物譚的な伝承、「火玉の話」のような世間話、さらには私たちもお聞きしている「唐話」なども報告されている。その海の伝承における幅の広さ、話柄の豊かさはやはり当地を代表するにふさわしい語り手の一人ということができよう。

弟の亀広翁（明治四十年一月十日生まれ）も、兄の牛蔵翁と同様漁業を生業としておられた。亀広翁は十四歳で漁師になり、漁にでかけたが、そのような機会に三十～四十歳代の人たちから話を聞いたものという。翁の伝えている話には笑話的なものや、やや世間話的なものが多いようであるが、漁師仲間の話す話がそのような傾向のものだったのであろう。お聞きした話の中には、「渡嘉敷ペークー〈ルカ島返し〉」という、笑話というよりもいくぶん神話的な伝承や、「文徳マサー〈空手の修行〉」「糸満マギー」といった笑話的な話、「平良シカマグチ」といった因縁化物譚といえる話、「後生バーリー」「国吉坂の遺念火」「新島の火の玉の話」といった世間話、それに「糸満やといの始まり」「北極星について」といった海の仕事や民俗に関する説明などがあった。

翁は漁が終わって家に帰れば父親の徳七さんから話を聞いたという体験もあり、家系伝承の中でも話を自分のものにしているようだが、漁団を編成して慶良間・渡名喜などに漁に行き、無人島に小屋を造って、夜はいろんな話を聞

くことが多かったということから伝承の主流はやはり本格昔話よりもこのような傾向の話が多くなったのであろう。[注(4)]

米須の仲宗根善道翁（大正二年二月十九日生まれ）の場合、喜屋武殿内出身の人から軍隊で一緒の時に話を聞かされたという経験を持っておられる。善道翁は生まれも育ちも米須であるが、終戦後は一年間を捕虜としてハワイにも過ごしたという。長く博労をされ、沖縄のほとんどの地に行ったことがある。趣味は三線で、弾くことはもちろん楽器の収集もされていたそうである。調査中にも祝い節などの弾き語りをして下さったりした。その翁の語った話にはたとえば「名護親方と具志頭親方」や「米須按司の敵討ち」「かぎやで風節」といった史譚があり、一方では「保栄茂タルチー」「文徳マサー」といった笑話も多く、いわゆる本格昔話は少ない。そこには、広く世間を渡り歩いた人としての特徴が現われているとみることができよう。

村芝居なども、話の伝承・伝播に一役買っている。賀数の照屋亀八翁によれば、賀数からすぐ東にある東風平（こちんだ）村当銘でやっていた村芝居で「モーイ親方」を見たという。これは当銘村の青年たちが舞台を作ってやったもので、八月十五夜にやったものであるらしい。賀数では村が小さく青年も少なかったのでやらなかったという。また、「モーイ親方」の芝居は那覇市内でも見たことがあり、糸満のほうにも芝居がやって来たという。また、大力で知られる「糸満マギー」なども、糸満の大城英次翁や上原亀吉翁、米須の仲宗根善道翁の話によれば、芝居で演じられていたということであった。

北波平の大城清助翁（明治四十年十一月六日生まれ）も、昔話は父親の八郎さんから、「昔、こういうことがあった」というような言い方で話を聞いたそうであるが、一方で、「継子話〈蝶の霊〉」（例話に掲げていない）という話は、旧暦の七月十三日、八月十五日のシシマイの時に、素人芝居でやっているのを見て覚えたものという。その梗概は、継母が下男に、墓参りをさせてやるから継子を殺せと命令。継子は自分の境遇を実母の墓で嘆いていると、実母の霊が蝶になって助けてやると語る。下男が継子を斬り殺そうとすると蝶が現われて下男の刀を防ぎ、下男はそのショックで死に、継母も蝶に襲われて死んでしまうというものである。

南波平の伊集スエ媼（大正二年十月十日生まれ）の場合は、父親が芝居を作って演じる人であったということをうかがっている。

このように、糸満の人たちが他の地域へ行くことによって、あるいは村芝居などのように、外の世界から訪れる人々、あるいはそれを取り入れることによって当地方における伝承世界は確かに広がりを増し、豊かなものになっていったといえるのである。

(7) 昔話の形式について

さて、当該地にはこれまで述べてきたように多くの優れた語り手たちがおられた。しかも調査の中でわかってきたことは、これまで本土に較べ南島においては乏しいと言われてきた語りの形式が、それなりにここでは見られるのではないかということであった。

昔話の形式について、まず豊原の国吉マツ媼によれば、昔話の呼称は「チテー話」「ンカシヌチテー話」（昔の伝え話）と言った。そして、昔のお年寄りたちは、昔話を語り始める前には、「グエーサチウンヌケービラ」（ご挨拶いたします）、語り終わると「ニフェーデービル」（ありがとうございました）とか「ワカイビタンデー」（わかりました）とか言い、また、途中の相槌には、「アンヤイビーンナー」（そうですか＝目上の人に対して）、「アンヤンドー」（そうですか＝目上の人に対して）、「アンヤンナン」（そうことである。

照屋の上江洲由豊翁（明治四十一年五月十九日生まれ）の場合は、昔話を語る時、最初に、「昔（昔々）、どこそこであった話でありますが」と言って姿勢を正されたが、それは翁の祖父母から聞いていたとおりの語り口であったという。例話として掲げた中にも、その語りの始めと終わりに翁に特有の型と思われるものが見られる。たとえば、「33　北谷王子と黒鉄座主」は「昔」で始まり、「そのくらい力が、この黒鉄座主というのはあったらしいですね」と

結ばれ、「40　名護親方と具志頭親方」も「昔」で始まり、「無事に中国からの派遣されて来られた方にもお見せすることができたというお話です」と結ばれている。また、「101 モーイ親方〈マブイの恩返し〉」も「昔」で始まり、「こういうお話がありますがね」と結ばれ、「111 逆立ち幽霊」も「昔々」で始まって、「それからはもう、逆立ち幽霊というのは出なかったというお話です」と結ぶ。さらに、「90　モーイ親方〈薩摩の難題〉」では、発端句はないがその末尾は、「どうどうと琉球国に、大きな使命を果たして帰って来たというお話でございます」と結んでいるのである。

それらは必ずしも本格昔話だけに限定されてはいないが、翁なりに冒頭を「昔」と語りだし、特に語り納めのところは相当意識して、「……（で）あったらしい」とか「……というお話で（ございま）す」といった形を、発端の句に対応するかたちで使っているように見受けられるのである。いわばそれは、翁に取っての語り結びの文句とも見られよう。[注(5)] 同様のものが武富の長嶺長行翁（大正二年四月四日生まれ）の語る笑話「121　ナヴァーグワーの知恵（イ）（尻拭き）」にも見られ、そこでは「昔ね」と語り出され、「もう、私としてもこれは話ですがね、今から百二三十年前だと思っております」と結ばれている。

与座の金城幸徳翁（大正八年四月七日生まれ）の場合もやはりその語りの発端句がきちんと語られている。例話でみると、伝説に分類した「6　暁城の名の由来」は「昔々」、「13　火返し〈ヒーゲーシ〉御願」でも「これは昔々の話ですよね」とあるし、武富の長嶺和男翁（大正三年六月八日生まれ）の場合も、そのいくつかには「昔」という発端句が付けられている。それらの話は必ずしもすべてが本格昔話というわけではなかった。[注(6)] しかしそこには、たとえば伝説なども昔話的世界のものとして享受しようとする一面がうかがえるようなのである。

ところで、同じ発端句でももっと別のかたちのものを見てみると、小波蔵の伊敷フヂ子媼（大正十一年二月一日生まれ）は、本格昔話の「69　大年の客」で、「あるお正月の夜にね、これ本当かうそか、これはわからんけどもよ、お爺さんから聞いた話だからよ」と語り出している。これはいかにも本格昔話の語り出しにふさわしいといえよう。ところが、同様の言い方は、糸満の上原カツ子媼（大正五年三月十日生まれ）の語る因縁・化物譚の「116　キジムナー

と友達（ロ）」にも、「私も小さい時分に聞いた話ですから、ほんとうかどうか知りませんけんど」とある。また、同じような言い方を、与座の伊敷清保翁（大正十年三月十七日生まれ）は、例話「12　左御紋の始まり」で、「そんなことあったかなかったか知らないがね」と語り出しており、最後を「左御紋の始まりはこれだったそうだ」と結んでいるのである。これも伝説として語られ、左御紋の由来を説く話でありながら、話者は昔話的な感覚でこの話を受け入れているようにも思えるのである。

ちなみに、同様の言い方を豊原の国吉マツ媼は、本格昔話の「56　継子話〈麦搗き・二十日月〉」の最後に、「そんな話やったが。ほんとか嘘かわからん。聞いただけだから」というふうに使っていた。そこにはやはり、虚構の世界で語られる昔話としてそれらの伝承を受け入れようとする姿勢がうかがえるのではないかと思うのである。

これらの例はあくまでも個人的な使われ方ともみられ、当地方全体での語りの形式の傾向を指し示すということではないが、沖縄の他地域の例、それに当地方の優れた語り手の口を通してみれば、本土における形式句のあり方とはまたおのずから異なった、独自の語りの形式というものが南島にも存在しており、そしてその一端は確かに糸満の地においても育っていた証左ともなるであろう。

(8)　おわりに

以上みてきたように、当該地における昔話伝承の現状は、これまで、私たちが主に本土を歩きながら味わってきた「伝承の終末」とでも言えるような状況とは違い、私たちにまだ沖縄地方での調査の可能性を示唆するものであったといえよう。まだ南島には伝承が生きているといえ、それを語り伝えるべき人々も今なお健在といえるのであった。しかし、いつまでもそのような状況が続くわけではないことは、私たち自身が南島を歩きながら強く感じていることもまた事実である。いずれ、遅かれ早かれ昔話伝承が終焉を迎えるであろうことは否めないのである。言うなれば、半世紀前の「鉄の暴風」とはまた異なる暴風が戦後の日本列島を吹き荒れ、今また南島をも巻き込んで吹き荒れてい

るとみられるのである。

注

(1) 昭和十四年、「佐渡民間伝承叢書」第二輯として民間伝承の会より発行。昭和四十八年、日本昔話記録5『新潟県佐渡昔話集』として三省堂より復刊。

(2) 昭和四十五年、「昔話研究資料叢書」第三輯として三弥井書店より発行。

(3) 『京都新聞』昭和五十八年十一月十八日付け夕刊コラム。

(4) お二人の詳細は福田晃氏「沖縄地方の民間説話―その「語り手」をめぐって―」(『日中文化研究』第五号《特集》「アジアの中の沖縄」平成五年、勉誠社刊)に述べられている。

(5) 福田晃氏注(4)のご論孜、および拙稿「南島説話の伝承者」(福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』平成八年、世界思想社刊)において、沖縄本島と八重山地方の語り手の事例をもとに、語り方における一定の型の存在を考察している。(本書解説「二　昔話採訪記録」の注(2)参照。

(6) 岩瀬博氏「南島説話の文芸性」(『奄美沖縄民間文芸研究』第十九号所収。平成八年)で、真実性を強調する沖縄の説話世界において、それを伝える者も聞く者も、真摯なハレの心意と厳粛な態度を保ちながら、話を楽しむ心情を内蔵しているのではないかと述べておられる。その論旨は叙述の内容に関わってのものであるが、このような形式句の面においても参考になろう。

四　糸満説話の伝承世界

福田　晃

(1) 伝承のジャンル

日本本土において民間伝承は、伝説・昔話―本格昔話・化物因縁譚・笑話・鳥獣草木譚を含む―世間話の三つに分類される。しかるに沖縄においては、神話が民間に息づいており、かつ史譚が伝説の枠を越えて伝承されており、この二つを加えて五つに分類される。そこに沖縄における伝承上の特質があると言えるが、その民間説話は、しばしばチティイバナシ(伝え話)と総称されており、そのジャンル間の異同が明確には示し得ないものとなっている。つまりその点にも、沖縄の伝承上の特質がうかがえると言える。

右のごとくではあるが、本書は、一応、その五つの分類にしたがい、かつ昔話の枠をはずして、各話を八つのジャンルに収めている。したがってそれは、一応の伝承の範囲を示すものであって、その分類は融通性を有するものと言わねばならない。

(2) 神話の伝承

1「アマミキヨとギジムナー」は『琉球神道記』巻五〈キンマモン事〉、『球陽』巻一〈琉球の分野及び開闢〉、『おもろさうし』巻十〈昔初(はじ)まりや〉などのアマミキヨ・シネリキヨ創世神話、『中山世鑑』巻一〈琉球開闢之事〉のそれと一連のものと言えるが、それは、

昔此国初。未ダ人アラザル時、天ヨリ男女二人下リシ。男ヲシネリキュト、女ヲアマミキュト云。二人舎ヲ並テ居ス。此時此島。尚小ニシテ。波ニ漂(タダヨウ)ナリ。爾ニ。タシカト云木ヲ現ジテ。殖テ山ノ躰トス。次ニシキュト云草ヲ殖。又阿檀ト云樹ヲ殖テ。漸ク国トス。二人。陰陽和合ハ無レドモ。居所並ガ故ニ。往来ノ風ヲ縁シテ。女胎

ム。遂ニ三子ヲ生ズ。

と叙する『琉球神道記』の〈キンマモン事〉の条に近い。しかし、伊集守吉翁の語りによると、それは『中山世鑑』の〈琉球開闢之事〉に見える阿摩美久の国作り神話の「久高コバウ森」に準じながら、アマミキョがお産をするとき、太陽や月に見えないように、ヤナブーという固い木を肩に担いだという。そして、ギジムナーは、この神の木を今に守っていると伝える。文献伝承にはうかがえない神話伝承と言える。

2「稲の始まり」は、玉城村百名の受水・走水、三穂田とかかわる「鶴の落し穂」伝承によるものである。今も百名の大前家が中心となり、この伝承にしたがう「天親田（アマウエーダー）」のクエーナにもとづく稲作予祝儀礼が、毎年正月にいとなまれている。しかるに、『中山世鑑』の〈琉球開闢之事〉には「阿摩美久、天ヘノボリ、五穀ノ種子ヲ乞下リ、（中略）稲ヲバ、知念大川ノ後、又玉城ヲケミゾニゾ蒔給」とある。また、『琉球国由来記』巻十三「玉城間切」の項には、

上古、阿摩美久、ギライカナイヨリ、稲種子持来、玉城間切、百名村之人、作ヤウ教ウケ、溝・小マシ田、苗拵稲蒔、百日成時苗取、浜川ウラ原親田、高マシノマシカノ田二、稲植初也。

とあり、四月稲ミシキヨマの時、琉球王が当地に御行幸なさるのはこの由来によるという。しかして、「其故、教ラレシ人ヲ、阿摩美久ヨリ、名ヲ米之子ト給タル由、伝来也」とし、「毎年五月、稲穂祭之時、高マシカマノ田ヨリ、稲之穂三筋、米之子家取来、巫火神（玉城）二祭奠也。是ヨリ稲穂祭、始タル由也。米之子末孫、于今連綿也」とある。この米之子家とは、先の大前家に当ると推されるが、鶴の穂落しによる民間伝承と阿摩美久伝来という記載伝承の異同が注目される。

3「五穀の始まり」は、『琉球国由来記』巻一「王城之公事」〈行幸于久高嶋〉、同巻十三「知念間切」〈中森之嶽〉、『琉球国旧記』巻三「公事」〈二月王幸於久高嶋〉などに見えるアナゴノ子、アナゴノ姥夫妻の五穀（七種）の壷発見譚ともかかわるものであるが、新垣武登翁の語りによると、百名シラタルとあれば、むしろ『遺老説伝』巻二、第七十三話に準ずるものといえよう。すなわちそれは、昔、百名の白樽と玉城按司の孫娘との夫妻が、東海に小島を見つ

け、小舟にて渡島し、海浜の貝類を食して毎日を暮らしていたという。しかして、

夫婦、共に伊敷泊に到り、以て子孫繁衍・食物豊饒を祈る。未だ尽くは祈り畢らざるに、忽ち一白壷の波に隨ひて浮び来る有り。（中略）婦女、喜びて其の壷を執り、其の蓋を控開するに、内に麦三種（一は小麦、一は葉多麦、一は大麦）、粟三種（佐久和、餅也、和佐）、豆一種を載す。（中略）此よりの後、五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る。之れを名づけて久高島と曰ふ。其の長女於戸兼、専ら祝女職に任じ、各種の祭祀を掌る。長男真仁牛は、父の家統を継ぐ。其の子孫、延きて今世に至るまで、外間根人為り。

と叙されている。しかるに新垣翁の伝承話は、シラタル夫妻の久高島の渡島を南山王滅亡の折に、戦乱を逃れてのこととしている。これは兄妹始祖の漂着伝承にしばしばうかがえるものであれば、あるいはこれには兄妹漂着の叙述が複合しているとみることもできよう。

4「大力のイッカンウェーブーとジョウサグンウェーブー」は、一般には「大人の足跡」とか「ダイダラボッチの畚担ぎ」などと称する巨人伝説に属するものである。しかしそれが照屋の御嶽に門中の宗家によって祀られているのであれば、それは巨人神話に属すべきものであろう。ちなみに『琉球国由来記』巻十二「兼城間切」〈照屋之嶽〉の項には、「神名、サトシキ若御イベ」とある。

(3) 伝説の伝承

5「糸満の地名由来」は、地名が聖地に由来することを説く伝承である。蟹は聖水の主、その聖なる蟹が糸繭のごとくに湧出させた泉水が糸満のウブガーと伝えるのだ。つまりその聖水を生命の源とするゆえに、当地を糸満と称したというのである。6「暁（あかちくすく）城の名の由来」も、城名もまた聖地に由来することを説く伝承である。が、これは聖なる鳥の鳴き声として、城の聖名を説明する伝承なのである。

7「与那原の綱引由来」、8「小波蔵の綱引由来」は、いずれも聖なる綱引き由来を説くのであるが、前者は大城

按司の娘の悲劇を言い、後者は兄妹の愛の深さを言う。また前者は沖縄固有の豊年祭、後者は薩南地方に連がる十五夜祭と異同するものであるが、いずれも収穫祭における聖なる神占の意義を有していたことは動くまい。

9「阿波根の飯石の由来」、10「金の砥石」は、いずれも石の聖性を説く伝説である。前者は成長する石の伝説、後者は財宝をもたらす石の伝承である。11「フチャギ餅の由来」は、ハレの食物の聖性をめでたい過去の出来事で説き、12「左御紋の始まり」は、左御紋の聖性を敗軍の大将の悲劇で明かす。ハレの聖性は、つねに幸福と不幸の狭間にあるというのであろう。

13「火返し御願」は、ヒーゲーシ御願の由来として語られているが、一般には嫁の心がけによって火の玉が退散できたという昔話として伝承されるものである。14「七月お盆の始まり」は、亡父のために孝行息子が始めたと説くもので、エイサーの念仏歌「親の御恩」「孝行念仏」に通じる。ちなみに本土においては、『盂蘭盆経』にもとづく亡母のために目蓮尊者が始めたとする伝承が一般的である。15「位牌の由来」は、本土の「鰯の頭も信心から」（つまらない物も信心の対象となればひどくありがたく思われる）という諺に準ずるものである。なお、「位牌の由来」は、一般にははからずも川に落ちて死んだ親を、その川で拾った板ぎれを形見として祀ることにしたという昔話として伝えられている。

16・17「ニービチ由来（イ）（ロ）」は、特に久高島の結婚習俗として伝えられるものである。久高島では、嫁入りのミジムイ（水盛）の儀礼のあと、花嫁は友人に囲まれて仮宿に行き、そこで二日過ごし、三日目の朝実家へ戻るが、その晩から夫の知らぬ所へ身を隠す。一週間か二週間すると見つかるようにするが、早く見つかってはならぬというのである。

18「伊原の喜納ワタブトゥの土地分け」は、伊原の英雄の事蹟として伝えるのであるが、一般には「ミルクとサーカの土地分け」として語られるものである。19「糸満のヒーダチ御願」は魚を追い払う拝みの由来、20「ユードレ墓の由来」は、死者に手拭を被らす習俗の起源を説くもの。21「波平玉川の由来」は、著名な組踊「手水の縁」とかか

わるもので、それによると、男は波平大主の一人息子の山戸、女は森小屋の玉津である。

22「遊女墓の由来」は、昔話「枯骨報恩」に準ずるものであるが、これは沖縄市山内にある遊女の墓、竹林塔の伝説として伝えるものである。ちなみに頭蓋骨が筍に刺されて「東風吹かばみ頭ぬ痛むい」と歌っていたという伝承は、はやく伊波普猷氏が「東風と死人の頭痛」（『島』第一巻第二号、昭和八年六月）に、

子供の時分、能くきかされた話だが、髑髏の下から孟宗竹が芽を出し、ぐんぐん延びて、髑髏を一丈余も突上げた時、その亡霊が、

東風の吹けば　み頭の痛みゆり　さんか珍しややだもならぬ

と口号んだ、といふことがある。（中略）こんなに高く上って、東風に吹かれると、頭痛がして、気持ちはよくないが、さんかが珍しくて、実に何とも言えない、ということである。（中略）散界は定界に対する語で、下界の同義語だが、夙に南島に入って、さんかに転化し、……

と述べている。これに先立って島袋源七氏は『山原の土俗』（郷土研究社　昭和四年刊）において、この話を「唄を歌う骸骨」と題して紹介している。昔樵夫が大宜味村字喜如嘉の山奥で、大川ペークという恐ろしい所に入ったとき、背後から女の歌う声を聞く。振り返ってみると、二、三間ばかり離れた後方の木に髑髏がかかっていた。よく見ると、鼻穴からは小さな枝がさし出ている。その唄は、

東風ぬ吹きば御髪んやむい
三日水ふしや飲みんならぬ

というものであった。伝える所によると、喜如嘉辺の女が薪取りに行き、毒蛇に撲たれて死んだが、発見されず、そのままそこに白骨となってしまったらしい、というのである。日本本土では、これに類似した話ははやく『日本霊異記』下巻第二七「髑髏の目の穴の笋を掲き脱ちて祈ひて霊しき表を示す縁」に見えている。それは「枯骨報恩」の話型にあるものであるが、髑髏に笋が刺さって「目痛し」と叫ぶ声がしたとする、いわゆる「あなめ」説話は、はやく

『古事談』第二に見える。それは業平が奥州で、小野小町の屍に出会ったこととし、その歌は「秋風の吹くにつけてもあな目あな目」というのであった。

23・24・25「真玉橋の人柱（イ）（ロ）（ハ）」は、豊見城村と那覇市を結ぶ要路の国場に架かる真玉橋の伝説。本土の「長良の人柱」に準ずるもので、その伝承は平安時代に遡る。その伝説は自ら物言った者が人柱とされたというものであるが、やがてそれは、親の遺言ゆえに物言わぬ娘が後日譚を添える昔話として伝承されるに至った。この「真玉橋の人柱」は、昔話化した「長良の人柱」によると言えるが、芝居・演劇として上演された「真玉橋由来記」との響き合いも留意される。25・26「白銀堂由来」は、これも昔話「話千両」を伝説化して伝承するもの。はやく、『遺老説伝』外附巻・第一三六話に見えており、これによると、倭人より銀を借りた人物は幸地村の美殿（ミドゥン）、その教えは「心怒れば、則ち手を動かす勿れ」とあり、「倭人、因りて名づけて白銀堂と曰ひ、遂に威部と為して尊ぶ」と結んでいる。28「普天間権現由来」は、宜野湾市の普天間宮にまつわる伝説で、ウナイが夢のなかで、船旅で台風に漂っている兄弟イキリを助けているとき、母親が起こしたために、口にくわえていた長兄を殺してしまい、弟二人は無事に戻り、長兄だけは戻らなかったという。いわゆるオナリ神信仰とかかわる伝承である。なお、『遺老説伝』巻一、第三五話には、安谷屋村の貧しい夫婦が、普天間権現の化身から黄金を得て幸福を得た話と、首里桃原邑にだれにも見られようとしない美しい女が、はからずも妹の夫に姿を見られたことを恥じ、普天間の洞内に入って二度と現われず、人々が神とあがめたとする話とが載せられている。その前者は『琉球国由来記』巻十一「諸寺縁起」〈普天満山三社並神宮寺〉にも見えるが、野原由宗翁の伝承は、むしろ後者のそれを複合したものと言えよう。

29「運天港由来」、30「婿入り橋の由来」は、舜天王の父と伝える源為朝にかかわる伝承。その為朝の事蹟は、すでに『中山世鑑』巻一「南宋淳熙十四年丁未舜天御即位」、『中山世譜』巻三「舜天王。附記」に見えている。たとえば、島袋仁栄翁の伝承とかかわる記事をあげれば、

○　舜天尊敦ト申奉ルハ、大日本人皇五十六代、清和天皇ノ孫、六孫王ヨリ七世ノ後胤六条判官為義ノ八男、鎮西八郎為朝公ノ男子也。（中略）暫ク命ヲ助テ、可被遠流ト、議定有テ、伊豆ノ大嶋ヘゾ被流ケリ。（中略）永万ノ比、嶋嶼ヲ征伐シ給ノ次ニ、舟、潮流ニ従テ、始テ流虬ニ至リ給。（中略）従之事、草ノ、風ニ靡クニ、不異。爰ニ於テ、為朝公、大里按司ノ妹ニ通ジテ、男子誕生有リ。尊敦トゾ付ケル。（中略）為朝公、故郷ヲ、慕心ヤ出来ニケン。妻子ヲ具シテ、順風ニ帆ヲ上、一里計モ走リケルガ、俄ニ北ノ方ヨリ、黒雲立覆トゾ見エシ、風アラク、浪ウヅマキ、吹返シテケレバ、（中略）妻子ヲバ、牧那渡の浦ニ下シ、形見ノ物ヲ与ヘ、命アラバ、又モ相見ントテ、暇申テサラバトテ、順風ニ帆ヲ挙タレバ、卒ニ帰郷ヲゾ、メサレケレ。女房モ、別ノ涙ヲ押ヘツツ（中略）浦添ヘノボリ、（中略）其子、漸ク十年余リニモ成リヌレバ、（中略）御歳十五ト申スニ、国人是ヲ尊ンデ、浦添按司トゾ申ケル。（『世鑑』）

○　舜天王之父。為朝公。（中略）投崇徳院。以助其戦。寡不勝衆。大敗被擒。諸将受誅。公見流于伊豆大島。宋乾道元年乙酉。公駕舟以遊。暴風遂起。舟人驚恐。公仰天曰。運命在天。余何憂焉。不数日。飄至一處海岸。因名其地。曰運天。即今山北運天江。乃公之所飄至也。公上岸。偏行国中而遊。国人見其武勇。尊之慕之。公通于大里按司妹。而生一男。……　（『世譜』）

などとある。しかし、そこにはワタキナ森や婿入橋などは見えてはいない。つまりそれが文献を越える伝承なのである。

(4)　史譚の伝承

31「かぎやで風節」は、王の前で謡われるので御前風（クジン）とも言われる琉歌楽曲の一つ、カジャディフーぶしの由来をいうもの。物言えぬ唖王子（チーグー）ゆえに、王位継承を拒まれた尚元が、重臣の大新城親方（ウフアラグスク）の励ましに、ついに言葉を発したという。そのときに大新城親方が喜びのあまり謡ったのが、

今日ぬほこらしゃや　なうにぎやなたてる
蕾で居る花ぬ露ちゃたぐとぅ

であったという。このときの曲節が「かぎやで風節」になったと伝えるのである。またこの王位継承事件は、「チーグー王」と題してしばしば芝居・演劇に演じられてもいる。ちなみに大新城親方は、尚清・尚元二代の三司官を勤めた人物で、その呼称は再任後のことで、先には池城親方と称されている。生年は不祥であるが、没年は、尚元十二年（一五六七）である。なお、日本本土にも物言えぬ唖王子の伝承が『古事記』中巻（本牟智和気王）、『日本書紀』巻六（垂仁記）に掲げられている。しかしその本牟智和気御子、誉津別皇子がはじめて言葉を発するのは、空行く鵠の声に誘われてのことであったとする。

32・33「北谷王子と黒鉄座主（イ）（ロ）」は、これも「悟道院変化」などと芝居に演じられたもの。尚敬王は第二尚氏王統十三代の王、在位三九年（一七一三～五一）。北谷王子はその弟。おそらくこれは、歴史的事件を伝承化したものであろう。34・35「京阿波根親方（イ）（ロ）」は、本土の将門伝説・弁慶伝説などにもみえる鉄人伝奇譚に属するもの。沖縄では八重山・竹富島のハザマ御嶽に祀られる根原金殿の伝承がはやくに知られるが、右の伝承例話は国頭郡金武村の「儀部鉄人」に類する。それは、「生きて千人、死んで千人」、本土から押し寄せた軍勢を退けたとするもので、その軍勢を薩摩からとする伝承は、慶長一四年（一六〇九）における島津の琉球侵攻にことよせたものと言える。ただし、この京阿波根親方は、尚真王（在位、一四七七～一五二六年）の家臣・京阿波根親雲上実基の謂い。『琉球国旧記』巻五「古城」（瀬長城）によると、豊見城の瀬長按司の子孫と伝え、同書巻一「首里」（京阿波根塚）によると、嘉靖年間（一五二二～六六）、尚真王の命により、上京して苦心惨憺の末に剣治金丸を獲得して帰国したという。しかし、その剛直な性格ゆえに暗殺され、その遺骸は時の女君神によって坊（町）外の地に葬られたと伝える。36「内間金丸」も、前項の「京阿波根親方」に準ずる鉄人伝奇譚。ただし内間金丸とは第二尚氏第一代の王・尚円王（在位、一四七〇～七六年）の俗称であるゆえ、ここには伝承上の屈折がある。一般には、東風平町富盛の八重

瀬城に拠った英雄カニカマドの事蹟として伝えている。

37「大里嘉手志川と金屏風」、38「綱の始まり」は、いずれも中山王の事蹟として伝えるもの。前者は、第一尚氏王統を創始した尚巴志王（在位、一四二二～三九年）の前身・佐敷小按司の巧智譚として伝えるもので、一般に昔話「藁しべ長者」（三年味噌型）にしたがうものである。これによって佐敷小按司は南山王を滅ぼし、やがて三山を統一したというのであるが、後者もその巧智譚と連動して尚巴志王の事蹟として伝承されたものであろう。

39～43「名護親方と具志頭親方（イ）～（ホ）」は、それぞれに巧智譚をもって伝えられる二人を名護親方を中心に対照して伝えるもの。名護親方は本名・程順則、一六六三年那覇久米村に生まれ、再三、中国に渡って漢学を学んだ碩学。江戸にも上って新井白石らとも交流し、本土にもその名が知られた。尚敬王の信頼も篤く、久米村総役を勤め、紫金大夫（三司官座敷）・名護間切総地頭職に任じられ、一七三四年に没している。名護聖人とも称せられた。一方、具志頭親方は本名・具志頭文若、唐名・蔡温、一六八三年、久米村に『中山世譜』の編者・蔡鐸の次男として生まれ、陽明学に通じた行政官として活躍。はやく尚敬王の国師を勤め、やがて三司官に任じられ、王家とも姻戚関係を結んで、その朝政を補佐したのである。一七三四年、和学に通じた首里出身の平敷屋朝敏らによる投書事件には、首謀者以下一五名を極刑に処することがあり、これが伝承例話にも影を投じているのである。

44「米須按司」は、『琉球国由来記』巻五「古城」（米次城）、『遺老説伝』巻一・第二四話にも見えるもの。ただし仲宗根善道翁の語りによると、夫人に横恋慕した人物は隣の大度按司とするが、『旧記』『説伝』には、「我瀬之子」とあり、〔犬の死体発見〕のモチーフは見えていない。が、米須按司夫人の事蹟として叙する点では一致する。しかるに、この伝承例話は奄美から沖縄諸島に及んで、木の精の由来を説く昔話「妻の仇討ち」として語られている。つまりこの「米須按司」は昔話の史譚化・伝説化したものと認められるのである。

45「瓦屋情話」は、一般によく知られている瓦屋節由来である。その瓦屋は、那覇・泉崎の東方湧田という所、今の壷屋で、その附近にある高い丘を瓦屋ツヂ、その妻は小禄間切の当間村の女だったという。しかし、豊見城村方面

の伝承によると、その女は同村翁長の高安門中の出身であったという。女を担いで行く国王の使いを高安のブシが追いかけたが、国王の旗印を示されて奪い返せなかったと伝え、今でも正月・七月には壷屋から翁長に拝みにくるというのである。46「吉屋チルー」もよく知られた話で、しばしば芝居・演劇にも演じられている。売られて那覇へ向かう途中に、「恨む比謝橋やわぬ渡さとぅ思てぃ　情ねん人ぬかきてぃうちゃら」と言い、遊廓では上句を詠み下句を返せる者しか相手にしなかったというのは有名な逸話。死後に抱え主が墓に詣ると、墓のなかから、「生きているときに粗末に扱い、死んでから水を供えても役には立たぬ」と歌ったとも伝える。47「チャタンモーシー」は、北谷真牛のことで、美声の持主と伝えられた女性。百名節に「北谷まうしぎやぬが歌声うち出せばなかべ飛ぶ鳥もよどで聞きゆさ」（北谷真牛が歌声を打ち出して、その声が空高くひびくと、空を飛んでいる鳥も止まって聞くよ）とある。その美声ゆえに北谷の按司のお召しによって城中に仕えたとも伝える。48「仲村渠マカトゥ」は、著名な仲村渠節の由来。その歌詞は、「仲村渠そばいどますだれは下げてあにあらはもとまば忍でいまうれ」（仲村渠の家は父母の目が厳しいけれど、裏口にすだれをかけたら、そこからでもいいと思うなら忍んできてください）という。情緒ある曲調によるものである。

(5)　本格昔話の伝承

49「天人女房」は、語り手の玉城ハル媼が「羽衣川」を宜野湾・真志喜の「森ぬ川」と注しておられるので、これは察度王の誕生をいう天人女房譚とかかわる伝承と言えよう。しかして、この奥間大親と天女の婚姻譚は、『中山世鑑』巻二「大元至正十年庚寅察度王御即位」の項に詳しく記載されている。52「アカマタ婿入り（ロ）（普天間権現由来）」は、28普天間権現由来」とかかわる伝承で、人に見られたことを恥じ、普天間の洞内に姿を消して神に祀られたとする『遺老説伝』巻一・第三六話を「蛇聟入」（苧環型）に習合したものと言えよう。

53「睡次郎」は、はやく『遺老説伝』巻一に見えており、しかもこの「隣の寝太郎」（鳩提灯型）の昔話は、沖縄

各地に伝承されている。54・55「難題聟」は、いずれも結末が悲劇で終わっている。したがってこれらは、難題聟を含んだ伝説というべきものである。

56「継子話（麦搗き・二十日月）」、57「継子の味噌弁当」は、本土には見いだせない話柄。しかし沖縄においては各地に広く伝承されている。61「継子台」は、宮古・伊良部島下地の通り池にかかわる伝承で、それが昔話として伝承されたものと言える。63・64「兄弟の仲直り（イ）（ロ）」は、本土にはほとんど見られない話柄で、奄美・沖縄方面に伝承されるものである。ただしその殺した獲物は「猪」とするのが一般であるが、伝承例話のごとく、「大鰻」とするのは沖縄諸島に見られるもの。しかし、前者が含む「立聴き」のモチーフは元来、「蛇聟入」（苧環型）のものである。

65・66・67・68「仲順流り」（イ）～（ニ）」は、昔話「孫の生肝」（三夫婦型）「孝子と金瓶」に属するものであるが、沖縄ではニンブチャーの唱える念仏歌に見出だされるものであり、しばしば芝居・演劇でも演じられてきている。そしてその原話は中国の郭巨孝子譚に求められるものである。71「泥棒の恩返し」は、一般に浦添の金持・城間ナーカのこととして伝えるものである。史譚に属すべきものが、固有名を後退させて昔話化したと言えよう。

72・73・74「鬼餅由来（イ）～（ハ）」75「鬼の家の便所」は、十二月八日のムーチー折目、ホーハイ祭りの行事由来として伝えられるものである。しかしてそれは、『琉球国由来記』巻一「王城之公事」〔十二月〕〈鬼餅〉の項に、

当国於禁裏、従大台所、御嘉例御盆一通、（御飯）並調餅、獻上於御内原也。諺曰鬼餅。上古、鬼害人間。因愁難忍。或人巧、以鉄作餅形、米餅相交、因与鉄餅。従其時、恐人間、去而、隠入于深山、不出于人村。故作餅祭于嶽、為佳例。互贈酬而食之、

とある。また、『琉球国旧記』巻三「公事」〈鬼餅〉の項には、

由来記。上古之也。首里金城村。有鬼害人。人不勝其難。妹巧做米餅。内装鉄塊。又以糯米做餅。雑乱擱在而食焉。鬼人視之。而乞餅。即与鉄餅以吃。即鬼深怕。而隠去深山。不敢出来。人各得其所。従此家々作餅。薦嶽神

並先祖。相送於親族・隣家。以賀人免其害。

とある。鬼を騙して鉄餅を食べさせた者を『由来記』は「或人」としているが、『旧記』は「妹」として昔話に近づくが、いまだ「鬼の口」や「鬼の家の便所」には及んでいない。しかるに『球陽』巻一「国初」は、『旧記』の「金城村。有鬼」を受けて、〈附、首里内金城邑の鬼人〉と題し、「遺老説伝に記す、首里内金城邑に一兄一妹有り」として次のごとくに記している。

次後、兄は大里郡北洞中に遷居し、時々人を殺して肉を吃ふ。村人、大里鬼と叫ぶ。妹、偶々往きて問候するも、家に在らず。但竈上の釜中に人肉を煮るを見る。（中略）妹曰く、家の裏に便を下すは礼に非ずと。堅く請ひて外に出づ。兄即ち小縄を以て妹の手を縛り、茅厮に行かしむ。妹、その小縄を将て樹枝上に掛け、遂に逃去を為す。（中略）

厥の後、兄、妹を問候して首里に来る。妹、遽かに一計を為し、兄を請じて岸上に座せしめ、即ち鉄餅七顆（糯米にて餅を為り、内に鉄丸を装す）・蒜七根、且米餅七顆・蒜七根を作り、兄に鉄餅並びに蒜を給す。鬼人、吃はんとして能はず。時に妹、前裙を開きて兄の前に箕居す。兄、怪しみて之れを問ふ。妹曰く、吾が身に二口有り。下口は能く鬼を喰ひ、上口は能く餅を喰ふと。即ち餅と蒜とを吃ふ。兄、大いに驚きて慌忙し、後岸に跌落として死す。是れに由りて毎年十二月、必ず吉を択び、国人皆餅を作りて之れを吃ひ、以て其の鬼災を避くの賀に傚ふと爾云ふ（鬼餅節は此れよりして始まる）。

前半で「鬼の家の便所」が叙され、後半で「鬼の口」の鬼餅由来が説かれている。

81「ハブの昇天」は、天に昇って龍になろうとした蛇に、口外しない約束をして、一旦裕福になった男が、その秘密を口外してたちまちに落ちぶれたという昔話に属するもので、ほぼ沖縄方面にのみ伝承され、しばしば伝説として語られている。82「フカに助けられた男」は、もとは八重山・黒島の多良間家に伝わる伝説で、多良間真牛（タラマモウサ）という人物が西表島に出作りに出た折り、遭難して無人島に漂着、たまたま鱶に助けられ、その背に乗って黒島に戻ったという。それで多良間家の人は、今もって鱶は食べないと伝える。この話が昔話化して沖縄各地に伝播している。

85～103「モーイ親方（イ）～（ツ）」は、史譚的性格をもつものから笑話的性格を含むものまでに及んでいるが、その中心は〈親方の智恵〉にあるとして、一括して本格昔話に類別している。史譚に登場する親方とは違って、モーイ親方の実在は不明。それゆえに、現実を越えて、享受者たちの親方（間切の総地頭、しばしば国王の補佐役の三司官となる）に対する期待や希望が実現したと言えよう。したがって、このモーイ親方話は、史譚としての親方話とも、あるいはそれを越えて、しばしば芝居・演劇に上演されてきている。

(6) 因縁化物話・笑話の伝承

104「生き返った大屋のアヒトゥ」105「後生戻りの話」106・107「ナーチャミー由来（イ）（ロ）」は、不思議な事実を伝える世間話に近い因縁話。葬制の習俗とかかわって発生する伝承で、ナーチャミィの習俗は、本土には見られない。110「平良シカマグチ」は、「子育て幽霊」をもって後生と現世とを往来できる資格をもつと説くものである。その冥界と現世とを往来した者としては、本土の小野篁が著名であるが、平良シカマグチは、唐旅をして中国から沖縄へ念仏を伝え、あるいは葬儀の獅子・ガンを招来した人物とも伝えられている。111「逆立ち幽霊」は、今日でも劇場で上演されており、それも大正年間に遡る。おそらく上江洲由豊翁の語りも、それにしたがうものと推される。

115～119「キジムナーと友達（イ）～（ホ）」は、はやく『遺老説伝』巻三・一二五話に、真壁郡宇江城邑の久嘉喜鮫殿と桑樹の妖魔の交友として掲げられている。しかしそれは、その桑樹を焼き払った後、はからずも朋友に変じた妖魔に小刀で襲われて死んだと伝える。しかもこの話は、しばしば家の興亡としても語られている。すなわち、キジムナーを裏切った家は滅び、これを迎えた家は栄えたとする、当地方の伝承は、隣の豊見城村・名嘉地大屋の繁栄を説くものがその中心となっている。ちなみに当家では、現在もキジムナーを庭に祀っている。

126～134「渡嘉敷ペークー（イ）～（ヌ）」は、「モーイ親方」と近似した話群であるが、彼が国のまつりごとの中核

となる「親方」の〈知恵〉に期待するのに対して、これはいちだんと庶民に近い「ペーク」（親雲上・ペーチン＝士族）の〈頓智〉に喝采するもので、本土の吉四六（きっちょむ）話・彦市話に近い。すなわちその〈知恵〉は〈おどけ〉にまで展開するものである。しかもその渡嘉敷ペークの実在は不明であるにもかかわらず、「お上（かみ）」に立ち向かう身近な存在として期待され、これもしばしば芝居・演劇に上演されるものであった。

136～140「糸満マギー（イ）～（ホ）」は、実在した力持ちの滑稽譚で、大男の行為がユーモラスに語られる。141～148「保栄茂タルチー（イ）～（チ）」は、隣の豊見城村保栄茂聚落に実在した人物の大力譚で、それは事実を超えて笑話の主人公に形象化されている。しかもそれは小さな英雄として、その「最後」まで語り伝えられていることが注目される。149「保栄茂ユーチー」はこれに準ずるもの。150～155「文徳マサー（イ）～（ヘ）」は、語り手たちがその武芸者ぶりを直接見聞した人物で、それは笑話というよりも、奇行を示す世間話とも言える。しかし、156～158「アガリ武士の力比べ（イ）（ロ）（ハ）」は、小男の〈頓智〉を説く笑話となっている。

(7) 鳥獣草木譚・世間話・対訳資料

本土に比べて、沖縄における鳥獣草木譚の話柄は少ない。生息する鳥獣が限られたせいであろう。しかるに、本土の鳥獣草木譚は、ヨーロッパにおける伝承に比するとき、その話柄は寡少である。それは動物葛藤を主題とする動物昔話がヨーロッパほどに成熟していないということでもある。それを端的に示すのが沖縄の伝承である。そして当糸満市の場合もこれに準じている。すなわち、動物葛藤を説くものは169「猿の生き肝」のみである。

これに対して沖縄における世間話の伝承はきわめて豊かである。それについては、拙稿「南島説話の伝承世界」（福田晃・岩瀬博編『民話の原風景―南島の伝承世界―』世界思想社　一九九六年）の〈世間話の分類〉で示している。それは、〈その一〉神の霊異〔告知〕〔邂逅〕〔懲罰〕、〈その二〉妖怪の奇異〔化物〕〔変化〕〔霊魂〕、〈その三〉人間の異常〔運命〕〔奇行〕に及んでいる。しかし、本書に収載した世間話は、171キジムナーの胸押さえ（イ）から

178「ヨウドレの由来」まで、そのほとんどが〈その二〉の「妖怪の奇異」にとどまっている。実際の伝承はもっと豊かなものであったに違いないが、これは聞き取り調査の限界を示すもので、地元の研究者による伝承調査に期待するところである。

対訳資料は、179「人の始まり」180「稲の始まり」が神話、181「犬の見つけた井戸」182「与座の名の由来」が伝説、183「慶留（ぎる）バーリーの祭り」184「米須按司の敵討ち」が史譚、185「アカマタ聟入（浜下り由来）」から190「モーイ親方（ヌブシの玉・勉強）」までが本格昔話、191「キジムナーと友達」192「名嘉地大屋とギジムナー」が因縁化物話、193「渡嘉敷ペークー」が笑話、194「雀孝行」が鳥獣草木譚、195「アヒラーマジムン」が世間話に分類されるが、その話柄の多くは本文資料に収められている。そのなかで、179「人の始まり」は古宇利島の始祖譚として伝承されることが多い。181「犬の見つけた井戸」は、佐敷小按司（尚巴志王）が金の屏風と取りかえて、南山王を滅ぼしたというもので、37「大里嘉手志川と金屏風」とかかわる伝承。いずれも注目される。

〔追記〕本稿引用の『琉球神道記』は、横山重氏編『琉球神道記　弁連社袋中集』（角川書店、昭和四五年）、『琉球国由来記』『琉球国旧記』『中山世鑑』『中山世譜』は、いずれも横山重氏編〔琉球史料叢書〕（角川書店、昭和四七年）、『球陽』は球陽研究会編〔沖縄文化史料集成8〕（角川書店、昭和四九年）、『遺老説伝』は嘉手納宗徳編訳〔沖縄文化史料集成6〕（角川書店、昭和五三年）の「読み下し」によっている。

沖縄・糸満市の昔話

本文資料

凡　例

一　本書に掲載した民間説話資料は、昭和六二年八月二日より同八日まで、昭和六三年八月四日より同六日まで、平成元年七月三十一日より同八月一日まで、平成三年八月十一日十二日の四回にわたり、沖縄県糸満市の各集落において、同市総務部企画開発課（市史編纂係）および同教育委員会社会教育課と立命館大学説話文学研究会が協同で実施した、聞き取り調査にもとづくものである。

二　本書には、同市において聞き取った民間説話資料の中に、原則として一話型一話を本文に掲げている。ただし、やや異なったモチーフなどを含み、注目すべき資料については一話を越えて掲げていることもある。その他の資料は類話として取り扱い、伝承地（集落名）・語り手名だけを記すことにとどめている。また同市において聞き取った民間説話資料は、従来の昔話（本格昔話・因縁化物話・笑話・鳥獣草木譚）に留まらず、神話・伝説・史譚・世間話に至るまで収載し、伝承実態の全貌を紹介すべく努めている。

三　本書における民間説話資料の分類・配列は、神話から世間話まで及ぶものとしているが、そのなかで昔話資料については、『日本昔話名彙』（柳田国男監修）、『日本昔話大成』（関敬吾編）を参考にしておこなっている。またその題名はできるだけ語り手の与えたものを残すようにつとめたが、多くは右の二書などを参考にしながら編者が付している。

四　本書の本文資料は、いわゆるヤマトグチのものを聴取したテープにより、それをできるだけ語りのままに翻字したものである。その翻字は、聞き取り調査と同じく立命館大学説話文学研究会会員がそれぞれ分担して行なっている。また対訳資料は、糸満市史民話担当の伊芸弘子氏によるものである。

五　本書の編集は、おもに立命館大学講師・同研究会ＯＢの松本孝三があたり、さらにその最終的編集は、金城善氏

（前文化課文化係長）、上原善明氏（現文化課文化係長）の協力のもと、立命館大学説話文学研究会指導教授の福田晃がおこなった。